

未来へつなぐ 「清流の国ぎふ」づくり

[座談会]

岐阜県知事

古田 肇

岐阜県立森林文化アカデミー学長

涌井史郎

オークヴィレッジ(株)代表

稲本 正

「岐阜は木の国、山の国」そして、「清流の国」。
第30回全国豊かな海づくり大会(平成22年)を契機とした、
森・川・海のつながりの中での環境保全意識の高まりが、
清流を「守る」「活(い)かす」「伝える」さまざまな取り組みに広がり、
現在「清流の国ぎふ」づくりに発展している。
平成24年度から導入された「清流の国ぎふ森林・環境税」もその一つ。
そこで「清流の国ぎふ」づくりをテーマに、それぞれの思いを語った。



「清流の国ぎふ」づくりについて意見を交わす(右から)稲本正オークヴィレッジ代表、
涌井史郎県立森林文化アカデミー学長、古田肇知事

※本企画は、岐阜新聞朝刊で2013年7月28日に掲載されたものです。

上・下流域の絆深く

流域連携、次世代に潤い



岐阜県知事

古田肇氏 ふるた はじめ

岐阜市出身。1971年通商産業省(現経済産業省)入省。羽田、村山内閣首相秘書官、外務省経済協力局長などを経て、2005年に県知事に就任し、現在3期目。

—— 涌井さんは、以前から「清流の国ぎふ」づくりに深く関わられ、今年4月に県立森林文化アカデミー学長に就任された。就任されてからこれまでの「ご感想は」。

涌井 アカデミーでは、森と木に関するスペシャリストを実学ベースで教育しており、本当に感動している。技能、実学レベルで問題を探つてから科学があり、その間を技術がつなぐという教育の在り方がとても良い。「清流の国ぎふ」づくりに向けた取り組みは、行政区界で捉えず、知事が言われるように一つの大きな「流域界」としての運動を展開する

—— 稲本さんは、森を再生する活動を長年続けておられるが、活動の拠点を岐阜を選ばれた理由と、森の再生活動の近況は。

稲本 私は日本人としては世界の森を最も多く回った人間だと思う。アマゾンには確かにすごい森があり水もあるが、川の表面

が鏡のように平らであり、川の落差が小さい。一方、明治時代に来日したオランダ人の土木学者が、日本の川を見て「これは滝だ」と言ったそうだが、中でも岐阜県の川は流量×落差が日本一。さらに言えば、日本は世界で一番美しい水がある国。つまり岐阜県は世界一水がきれいな所といえる。きれいな水は森と川の健康状態が決まる。森は木を植え、間伐も必要。山をきれいにすれば保水力が上がる。NPO法人ドンクリの会では、ナラ、クスギ、ホオ、カツラ、トチなど広葉樹の苗を育てて各地に送っている。

—— 「清流の国ぎふ」づくりに、上下流域の連携が欠かせないが、県の取り組みは。

知事 短期間に「清流」をテーマにした▽全国植樹祭▽全国豊かな海づくり大会▽ぎふ清流国体・ぎふ清流大会を行った。特に海づくり大会では、山・森・川そして海のつながりの中で私たちは生かされている、というメッセージを発信した。この呼びかけは、具体的な活動になって少しずつ広がっている。例えば、下流の伊勢湾の、流木を含む漂着物問題に対応して、愛知県・三重県の人たちと上流の郡上地方に集まって森林の除伐作業を行った。また揖斐川流域の清掃活動は、今年も六つの市町・11カ所に3千人が参加するほどに広がった。清流を守り、森をつくる実践を通して上流、下流域が絆を深めている。

—— 森林文化アカデミーにおける人材育成のポイントは。

涌井 やはり現地、現物主義。日本は大変長い列島だが北だから寒い、南だから暑いという構図ではない。世界でも稀な多様な

人の内側の環境も



岐阜県立森林文化アカデミー学長

涌井史郎氏 わくいしろう

神奈川県出身。2003年に日本国際博覧会(愛・地球博)会場演出総合プロデューサー、2011年に国連生物多様性の10年日本委員会委員長代理を歴任。現在、岐阜県立森林文化アカデミー学長、東京都市大学教授、東京農業大学客員教授に就任。

国土特性がある。それぞれの現場で応用しながら実学を展開しないと地域に根付いていかない。アカデミーには、森や木に関心がある人を応援する生涯学習講座、林業者の短期育成プログラム、森林管理のプロを育成するエンジニア科とクリエイター科がある。また、国際交流も進め、森が健康でエコノミーとエコロジーが共存できるシステムをつくる課題にも取り組む。

知事 国際交流といえば、ドイツのバーデン・ヴュルテンベルク州の視察団が来岐したときに、「岐阜は清流の国だ」と申し上げたら、「われわれは清流の州だ」と言われ、意気投合した。今後、アカデミーとこの州にあるロッテンブルク大学で森づくりや「清流」をテーマにした交流を始める。

稲本 この州には、世界の環境都市といわれるフライブルクという街がある。城壁のある街で、城壁内には自動車を入れない。サッカー場は太陽光発電で電力を賄い、昼に発電してナイターができる。

知事 この街はドナウ川とライン川、支流のネッカー川と、川に恵まれた所。

稲本 しかし、清流では絶対、岐阜県の方が勝つ。

涌井 「清らかさ」という面では、岐阜県の川はけた違いだ。ところで、日本の国土は、大宝律令(701年)ができたときに令制国、今の県のようなものが成立し、64の国と二つの島が決められた。この基準は流域だった。当時、流域こそが人々の暮らしを支える生態学的ユニットだということ

が分かっていった。だから、つのがきな流域界で捉える知事の考えはすばらしい。その意味で岐阜は個性的かつ日本に貢献できる。なぜなら岐阜がしっかりとしなかつたら富山湾も伊勢湾もだめになるから。

——将来の担い手である子どもたちが、木の魅力に触れることはとても大切と思うが。

稲本 自然や森に何か月も触れない子どもはイライラしやすい。最近の調査では、疲労を感じる幼稚園児が多くなっていることが分かった。治すには森の力を借りること。木に触れることが五感を良く働かせる。疲労は

岐阜の清流は世界一



オークヴィレッジ(株)代表

稲本正氏 いなもと ただし

富山県出身。1974年に飛騨高山でオークヴィレッジを創設。81年に生態系の回復と環境教育の実践を目指しNPO法人ドングリの会を発足。現在、岐阜県教育委員会教育委員、東京農業大学客員教授などに就任。

森林の中で自由に遊べるようにしている。また、一方でこの地域の古城山一帯は多様な植物に恵まれ、驚くことに日本を支える価値のある森林資源もある。それはエゴノキ。これがないと和傘ができない。ろくろ(傘骨をつなぐ歯車のような部品)の材はエゴノキでなければだめ。供給できるのは岐阜県だけ。一方でろくろを作る職人も1人という。鶉かごを編む人、和紙をすくための「すだれ」を作る人も少ない。岐阜県には隠れた森林資源と、匠といわれる職人がたくさんいた。それを川を通じた物流網が支えた。この独特の価値を県民の皆さんに知ってほしい。

の町屋建築である吉島家住宅を見て「地球を半周しても見た来た甲斐があった」と言った。名言だ。飛騨の匠は世界で評価されている。県民の皆さんにも、いま一度評価し直していただきたいと思っている。

——最後に、今後の「清流の国ぎふ」づくりについて。
涌井 人類は、他の生物のご厄介になっている。日本人は生態系から受けるサービスが分かっているから、独特な自然信仰が生まれた。そして、人が、神・自然の許しを得ながら、適度に手を入れることが最も望ましいと気づいた。これが里山。里山は元本に手を付けないで、利息で暮らす仕組みだ。

持続的な未来、われわれの世代だけでなく次の世代も潤う、そういう県土づくりが大切。「清流の国ぎふ」というのも、川や沢の流れを大事にしていっただけではなくて、脈々と命を未来につないでいける、その象徴を「清流」という言葉に込めた、と私は考えている。岐阜県は、自然との循環・共生型社会をつくるモデルとして、非常に適していると思う。

稲本 私が委員を務めている県教育委員会では「清流の国ぎふ」の精神を「清流スピリット」と言っている。これを具体化するため、にモデル的な学校をつくりたい。アカデミーもその一つ、作家のC・Wニコルさんと私がつくった森の学校(宮城県東松島市)も一つ。



美濃市曾代 県立森林文化アカデミーにて

それに類するものを県内の中学、高校でやりたい。

知事 お二人のお話を通じて「清流の国ぎふ」づくりが、自然環境、ものづくり、教育、心などあらゆるところにつながっていることを再認識した。県民の歌にも「岐阜は木の国、山の国」「岐阜は野の国、幸の国」「岐阜は詩の国、水の国」とある。この歌に全て含まれている。さらに、上下流、全国各地、そして世界につながる思いでわれわれは「清流の国ぎふ」づくりをやっているのだと、しっかりと胸に刻んで前に進んで行きたい。